



令和5年 2月15日
第 485号
新発田市立東豊小学校

ホームページ <http://toho.shibata.ed.jp>

聞くと聴く

校長 飯塚 進

「3年B組金八先生」というドラマがありました。テーマの1つに「生徒の心の荒れや校内暴力に向き合うこと」があったと思います。授業中に先生に文句を言ったり、けんかが始まったりという状況です。その文句を言ったり、けんかをしたりする生徒には、それぞれの背景が描かれていました。心が荒れてしまい、暴力的になることを擁護するわけではありませんが、共感できる状況がありました。

令和の時代では、児童生徒の心の悩みはあるものの、校内暴力については、全国的にほとんどないようです。当然よいことだと思います。しかし、先日気になることを本で読みました。「授業中、きちんと座って、きちんとノートを取り、真面目に授業を受けているように見える。しかし、聞いていても心ここにあらず、何も感じず、何も考えていない。ただ、黒板をきれいにノートに写している」児童、生徒が、相当数いるというのです。

この状況を、佐藤学氏（東京大学名誉教授）は「学びの偽装」と呼び、学校が荒れていた時代よりも深刻な問題がそこに潜んでいるというような捉えをされていました。確かに、「分からないから文句を言う。」「気に入らないことがあるから不満に思う、そして怒る。」ということは、生きていればあること、いかにも人間らしい言動のように思います。分からなくても、嫌でも、何も感じず、何も考えず、ただ言われることをしていることは、確かに心配すべきことです。

話は少し変わりますが、1月20日に6年生のスキー教室を行いました。初心者のみなさんがたくさんいました。当然、午前中の最初は苦戦をしていました。ところが、午後になれば、みんなとても上手になり、気持ちよくゲレンデを滑っていました。子どもたちの上達の速さには驚くばかりです。スキー教室終了後、指導者の方から6年生の子どもたちをたくさん褒めていただきました。その中の1つに「6年生の子どもたちは、とてもよく話を聞いてくれますね。だから上手になるのが速いのです。」というお話がありました。

何かを学ぼうと人の話を聞く時、そこに「心」があるかが重要です。スキー教室での6年生は、正に「上手になりたい。」という心持ちで指導者の話を聞いたから上達が速かったのだと思います。

話は目と耳と心で聴く（「聴」の漢字の中に、目と耳と心がある）ことが大切だと言われます。東豊小学校の子どもたちには、何も感じず、考えず、ただノートに写すのではなく、6年生のように、目と耳と心で聴くことができる人であり続けてほしいと思います。